

受賞者の業績



小山田 富子 53歳 (保健婦・岩手県)

昭和38年に安代町に奉職。以来、医療開拓地で乳幼児の健康相談、部落巡回での家族計画指導等を実施して母子保健の改善に寄与した。また広大な面積の無医村地区で新生児訪問を行い、乳児死亡ゼロを達成した。さらに、母乳栄養の推進、食生活習慣の確立を目指したむし歯予防教室等、特に栄養指導を重視した積極的な活動を展開している。



男 澤 智江子 54歳 (児童委員・宮城県)

昭和40年より涌谷町に保健婦として着任以来、母子保健体制の整備を展開し、低体重児の出生数の減少、乳児死亡数ゼロの実績をあげた。また子育て支援活動として親同士の交流、子ども同士の触れ合いの場を設定するなど、母と子の心の健康づくりに尽力。本年三月退職後も、町民会議副会長として、地域の青少年の健全育成運動で各種の事業を展開している。



森 田 玲子 52歳 (助産婦・東京都)

昭和43年より、福生市で開業する義母とともに、数少ない開業助産婦のなか自然分娩希望の妊婦を支援し続け、妊産褥婦への保健指導を実施。働く母親が増える一方で、認可保育施設が少なく、無認可保育施設として、認可施設に対応しきれない乳幼児を看護的立場で保育。また、地域の母親への保育訪問指導を実施し、市内外の広域にわたり活動を続けている。



遠藤 郁夫 51歳 (医師・神奈川県)

2年間の病院勤務のあと、昭和47年、小田原市に小児科医院を開業。同時に小グループを対象とした育児教室を開設し、地域の育児支援、健康管理の実践に多大な貢献をした。また幼児期から学童期の喘息、夜尿症、不登校児等やその他の問題児を集め、健康な子どもといっしょに「早朝テニス教室」を開催する等、地域に密着した幅広い活動を展開している。



筑波 文枝 47歳 (保健婦・新潟県)

昭和47年浦川原村に着任。以来安産教室の開設、乳児相談の実施等に取り組み、住民から多大な信頼を寄せられている。また昭和60年に開催した心身障害児療育教室の活動をもとに「浦川原村手をつなごう親の会」を発足させた。人口4000余の当村で正会員17人、賛助会員56人の大組織となり、地域での心身障害児支援の中心的役割を担うまでに発展させた。



寺沢 真砂子 45歳 (保健婦・長野県)

昭和50年より朝日村で一貫して地域保健に尽力。母親教室・健診の充実、有線テレビにおける啓蒙番組の放映など積極的な活動を展開。母親のネットワークづくりと子どもの体力増進を目的としたムーミン教室は、伝承遊び等を取り入れた地域色豊かな育児の場となっている。さらに祖父母対象の子育て学級、グラマの会を開設。世代間の意識統一に努めている。



久木野 和子 45歳 (栄養士・静岡県)

昭和45年より在宅栄養士として妊産婦・乳幼児を対象に実践的な栄養指導を行う。妊娠初期の栄養摂取の重要性を説くとともに、食生活の原点は乳幼児期にあるとの視点から、健診時に味覚教育を実施。成人病予防策として低塩低糖を推奨。個別要素を重視した適切な指導は多くの母親から絶大な信頼を得ている。また、地域保健組織の育成にも力を注いでいる。



國島 崑久夫 47歳 (聴能言語訓練士・愛知県)

言語障害の専門家として、吃音および構音障害児(者)の指導・研究、難聴児早期発見に尽力。愛知県総合保健センターにて吃音治療を行い、受診者の8割以上に改善がみられた。また生後6か月児を対象に簡便な聴力スクリーニングを試行。その方式は高く評価され、三歳児健康診査聴覚健診の「愛知県方式」として全国に紹介され、他県の模範となっている。



竹谷 千津代 47歳 (保健婦・京都府)

京都市のベッドタウン向日市で、地域の多様なニーズにこたえるべく、新生児の全戸訪問等きめ細かな母子保健対策を実施。特に障害児の早期発見・早期治療体制の確立に尽力し、療育の場としての各種教室の開設、支援障害児の親の会の組織化等にも取り組む。さらに子育て支援グループづくりにも力を注ぐ等、精力的な姿に、地域住民は大きな期待を寄せている。



山崎 統子 51歳 (保健婦・島根県)

過疎・少子化の進行著しい伯太町で29年余、意欲的な母子保健活動を展開。昭和48年の母子健康センター開設にも寄与、安全な施設分娩を促進する。母子健康手帳交付時の保健指導強化のため、冊子「すこやか」の作成による妊産婦の保健指導強化に努める一方、母と子の歯の健康教室の開催を通し、う歯の予防と治療の必要性を訴え多大な効果をあげている。



福光 澄子 50歳 (母子愛育班員・香川県)

昭和41年に母子愛育会入会。以来、「母子保健が社会を支える基本」との信念のもと、家庭訪問、母乳推進運動等の愛育会活動を地道に展開。地域の低体重児出生、乳児死亡、死産の大幅な減少に貢献する。愛育班組織の活性化、発展を目指した改革にも尽力する。今日では、調査研究事業、後継者の育成等に管内のリーダーとして活躍している。



於 田 初 美 50歳 (助産婦・宮崎県)

19年間の病院勤務を経て、昭和60年「走るマタニティーハウスおだ助産所」を開設。退院後の沐浴・母乳育児等の訪問相談を中心に活動している。また宮崎保健所の委嘱助産婦として妊産婦・新生児の訪問指導、母親学級の講師等で活躍中。アドバイザーとしての地域に根ざした活動は高い評価を受け、年々減少する開業助産婦の新たな役割を担っている。



宮 崎 フユ子 48歳 (保健婦・鹿児島県)

昭和43年出水保健所に着任。以来、地域ぐるみで健康問題に取り組む重要性と人材育成の必要性を実感し、保健補導員の育成に積極的に取り組んだ。また障害児をもつ母親と子どもたちの交流の場「リボン会」の結成、医療福祉関係者との連携を目的とした「630ネットワーク」の結成等、地域のネットワークづくりと人材育成に幅広い活動を行っている。



奥 岡 タカ子 50歳 (母子保健指導員・札幌市)

昭和55年から札幌市の委託を受けて妊産婦、新生児、家族計画等の訪問指導を行い、現在までの訪問件数は8,400件にも上る。相手の家庭状況に応じた指導、訪問後の状況確認等、妊産婦の相談相手として活躍し、育児不安を訴える母親の心の支えとなっている。在宅保健婦としての14年間のキャリアを生かした活動は高く評価され、訪問希望が数多くある。



水 嶋 志津子 52歳 (保健婦・岡山市)

昭和39年、岡山市に奉職。以来、一貫して母子保健サービスの充実に尽力。育児不安を抱く母親のために地区内での交流の場としての母子クラブを活性化し、全市的に発展させた。また乳児全数訪問を実施し、発達・育児上問題をもつ障害児の早期発見、早期療養のシステムづくり、ダウン症児等親の会の結成等、常に市民サイドに立った活動を展開している。